

癩者^{らい}クーラウ

"Koolau the Leper"

翻訳：高野泰志

「俺たちが病気だからといって、あいつらは俺たちの自由を奪おうとしている。俺たちは法にも従ってきた。何も悪いことはしていない。なのに俺たちを監獄に入れようというのだ。モロカイ島は監獄だ。みんなも知ってる通りだ。そこにいるニウリは七年前、妹をモロカイに連れて行かれた。それ以来一度も妹に会えずじまいだ。もう二度と会えないだろう。きつと死ぬまであそこに閉じ込められたままなのだ。そんなことをあの娘が望むわけがない。ニウリが望んだことでもない。この土地を支配する白人どもが決めたことだ。そもそもあの白人どもは何者なのか？」

俺たちにはちゃんとわかっている。親父たちや、親父の親父たちにずっと聞かされてきたからだ。あいつらは子羊のようにやってきて、甘いことばで話しかけてくる。そりゃあ甘いことばも使うだろう、なんたって俺たちは数も多く、強かったからな。そしてこの辺の島々はみんな俺たちのものだったのだ。そう、奴らは甘い言葉で話しかけてきたのだ。あいつらは二種類だ。そのうちのひとつは俺たちの許可を求めてくる。寛大な許可をだ。神のことばを伝道させてくださいとな。もう一種類も俺たちの許可を求める。寛大な許可をな。俺たちと交易をさせてくださいと。それが始まりだった。今ではこの辺の島々はみんな奴らものだ。この土地すべてが、牛もみんな——全部奴らものになったのだ。神のことばを伝道する連中と、ラム酒のことばを伝道する連中が一緒になって、偉大なる首長になったのだ。部屋数の多い大邸宅で王様のような生活をして、大量の召使いに面倒を見させているのだ。何ももっていない奴らが、すべてを手に入れたのだ。そしてお前たちが、俺が、カナカの民が腹をすかしていると、あの連中は鼻で笑ってこう言うのだ。『だったらなんで働かないんだ？ プランテーションがあるじゃないか』とな」

クーラウはそこでことばを止めた。そして片手をあげ、節くれだってねじれた指で、黒々とした髪にかぶさる、燃えるようなハイビスカスの花冠を持ち上げた。あたりは銀色の月光に浸っていた。穏やかな夜だったが、クーラウのまわりに座り、耳を傾けていた人びとはみな、戦いの跡の残骸を思わせた。顔つきは猛々しかった。だがあるものは鼻のあるべき場所にうつろな空洞が口を開けていた。あるものは手が腐り落ちたところが、切り株のようになっていた。全部で三〇人ばかりのこの男女の集団は除け者にされた連中ばかりだった。彼らには獣の印が刻まれていたのだ。

強い芳香を放ち、明るく照らし出された夜のさなか、みな花冠をかぶって座っていた。クーラウの演説に賛意を表そうと、唇から異様な音を漏らし、喉から軋るような音を絞り出し

ていた。この連中は、かつては男であり、女であった生き物たちだった。だがすでに男でも女でもなくなっていた。彼らは怪物であった——顔も身体も、あらゆる人間的な要素をグロテスクに真似たようであった。ぞっとするほど身体が損なわれ、歪んでおり、何千年ものあいだ、地獄の業火で苦しめられ続けた生き物の様相を呈していた。手は、たとえ残っていたとしてもハルピュイア（ギリシャ神話に登場する、頭部は女性、身体は鳥の、不浄の怪物）の鉤爪のように曲がっていた。顔はなにか別のものを継ぎ足したか、作りそこねたか、気の狂った神が生命の仕組みを弄ぶなかで、叩き潰し、壊してしまったかのようなようであった。そここに、狂った神が途中まで作りかけて放置したような容貌が見られた。ひとりの女性など、かつて目のあった場所に穿たれた、見るも恐ろしい一對の穴から、焼けるように熱い涙を流していた。ある者は痛みに苦しみ、胸の奥からうめき声をあげていた。ある者は咳が止まらず、布を引き裂くような音を立てていた。ふたりは痴愚であったが、むしろ作っている途中にうっかり作り損ねた巨大な猿といった有様で、普通の猿が天使に見えるほどだった。そのふたりは月明かりの中で顔をしかめ、わけのわからないことばを発していたが、その頭にもしおれた黄金の花々が飾られていた。ひとりには膨れ上がった耳たぶがまるでうちわのように肩をパタパタ叩いていたが、オレンジと真紅の豪華な花を摘んで、身動きするたびに是为了ためくその巨大な耳に飾りつけていた。

この連中の上に君臨する王がクーラウであったのだ。この土地こそがクーラウの王国であったのだ——花で埋め尽くされた谷、突き出し、そそり立つ崖や岩、野生の山羊の鳴き声漂うこの土地が。三方向には厳しい岩壁が取り囲み、そこには熱帯植物の派手な掛け布が飾られて、ところどころに洞窟の入口が口を開けていた——クーラウの臣民たちの、岩でできたねぐらである。四つ目の方向には大地がとてつもない深淵に落ち込んでいた。遙か下方に目をやると、ここより低い山の頂や突き出た岩の天辺が見え、それらの裾に太平洋の大波が打ち寄せ、泡をたてながら地響きをとどろかせていた。天気によければ、カララウ・ヴァレ一の玄関口となっている岩だらけの浜に舟をつけることもできた。冷静な判断のできる登山家であれば、その浜からカララウ・ヴァレ一の上まで登ることもできるだろう。そしてクーラウが支配する頂上部分のこの山あいまでたどり着くこともできるだろう。しかしここまで登ってこようと思うのなら相当冷静な判断ができねばならず、また野生の山羊の踏み分け道も見分けられなければならない。驚くべきことだが、人間の残骸の寄せ集めともいえるクーラウの民は、そのどうしようもないほどみじめな身体を引きずりながら、この目もくらむような山羊の踏み分け道を通して、このような未開の場所にまでたどり着くことができるのであった。

「兄弟たちよ」クーラウはまた話し始めた。

しかししかめ面をしていたひとり、猿のまがい物のような男が、狂ったような激しい叫び声を発したので、クーラウはその甲高い哄笑が岩壁をあちこち跳ね返り、生き物の気配のない夜を切り裂いて遠くまでこだましていくのを待たねばならなかった。

「兄弟たちよ。おかしくはないか？ この土地は俺たちのものはずだ。だが見るがいい。今、この土地は俺たちのものではない。神のことは、ラムのことは説く者たちは、土地を奪った代わりに俺たちに何をくれたというのだ？ お前たちは土地の代価として、一ドルでも、たったの一ドルだけでも、この中のひとりでも、受け取ったものはいらるだろうか？なのにこの土地は奴らのものになってしまった。その代わりに奴らは俺たちに向かつて、この土地で、奴らの土地で、働いても構わないと言う。しかも俺たちが働いて生み出したものはみな奴らのものになってしまうのだ。昔は俺たちは働く必要などなかったというのに。それだけではない。俺たちが病にかかると奴らは自由まで奪おうとするのだ」

「そもそも誰が病気を持ち込んだのだ、クーラウ？」そう詰問したのはキロリアーナという、痩せているが鋼のような体格をした男である。顔が笑っている牧神にあまりにも似ているために、足の代わりに割れた蹄があるのではないかと想像してしまう。確かに割れてはいたが、その裂け目は巨大な腫瘍とどす黒い腐敗の跡であった。だがこの男こそキロリアーナ、群れの中でも最も勇敢な山登りの達人であり、あらゆる山羊の踏み分け道に精通し、クーラウとその哀れな部下をカララウの奥地まで導いてきた男なのである。

「そうだ、よくぞ聞いてくれた」クーラウが答えた。「かつて俺たちの馬が草を食んでいた場所に作られた何マイルにもわたるサトウキビ畑で、俺たちが働こうとしないからといって、奴らは海の向こうから中国人の奴隷を連れてきた。そしてその連中と一緒に、中国の病がやって来たのだ——俺たちはその病にかかり、そのせいで奴らは俺たちをモロカイに閉じ込めようというのだ。俺たちはカウアイで生を享けた。俺たちだって他の島に行くこともある。ある者はこっちの島に、他の者はあっちの島に、という具合に、オアフやマウイ、ハワイ、ホノルルなどに行くことはある。しかしいつだって俺たちはカウアイに戻って来た。いったいなぜ戻ってくるのか？ そこには理由があるはずだ。その理由は、俺たちがカウアイを愛しているからだ。俺たちはここで生まれた。ここで暮らしてきた。だから死ぬときもここで死ぬのだ——万が一にも——万が一にも——俺たちの中に臆病風に吹かれるものが出て来ない限りは。そんな者にはここにいてほしくない。そんな者にはモロカイがお似合いだ。もしそんな者がここにいるのなら、この場にとどまらなくてもよい。明日、兵隊どもが浜に上陸するだろう。臆病者は奴らのところに降りていくがいい。すぐさまモロカイまで送ってくれるだろう。俺たちはここに残って戦うつもりだ。しかし俺たちは死なない。俺たちにはライフルがある。お前たちも、人がひとりずつ這って通らなければならぬ狭い踏み分け道があるのを知っているだろう。俺はかつてニイハウでカウボーイをしていた。だからこのクーラウは、たったひとりでも一〇〇〇人の敵を相手に踏み分け道を守り通すことができるのだ。ここにカパヘイがいる。かつては裁き人であり、誉れ高い男であった。それが今やお前たちや俺と同様、鼠のように狩りたてられている。この男の言うことを聞け。この賢者の言うことを聞くのだ」

カパヘイが立ち上がった。かつては部族の裁き人であった男である。プナホウの大学で学んでいたこともある。商人や宣教師の利害を守ろうとする領主や酋長、海外の列強の高官たちと食事をしたこともあった。カパヘイとはそんな男であった。しかし今はクーラウが言うように、鼠のように狩りたてられる立場にあり、法の埒外にいるのだった。人間に起こりうる恐怖のあまりにも深いぬかるみに沈み込んでいるせいで、法を超越するとともに、法に見捨てられてもいたのだ。顔に表情はない。ただいくつかの穴が口を開けているだけであり、瞼のない目が髪がなくなった額の下で煌々と燃え盛っているだけである。「トラブルは避けようではないか」とカパヘイは話し始めた。「我々は放っておいてほしいのだ。なのに奴らがどうしても干渉してくるといふのなら、トラブルは奴らが招いたものだ。その代償だつて奴らが払うべきなのだ。俺の指は見ての通り、なくなってしまった」カパヘイは皆に見えるように、手に残った切れ端を掲げた。「しかし親指の関節はまだ残っているのだから、かつて隣の指ができたのと同じくらい力強く引き金を引くことだつてできるのだ。俺たちはカウアイを愛している。俺たちはここで生き、ここで死んでいくのだ。モロカイの監獄などへは絶対に行かない。病は俺たちが招いたものではない。俺たちに罪などない。神のことはトラムのことばを説く者どもが、盗まれた土地で働く苦力たちと一緒に病を持ち込んだのだ。俺は裁き人であった。俺は法と正義をよく心得ている。その俺に言わせれば、他人の土地を盗むのは不正なのだ。中国人の病を人にもたらすのも不正だ。そして病にかかったものを一生監獄に閉じ込めるのも不正なのだ」

「人生は短い。そして日々は痛みに満ち溢れている」クーラウは言った。「だから精いっぱい酒を飲み、踊り、楽しむうではないか」

岩に穿たれたねぐらから瓢箪がもち出され、皆にまわされた。瓢箪にはセンネンゾクの根を蒸留した強烈な酒が入っていた。その火の水が一同にまわり、頭にまでのぼると、そこにいた誰もがかつて人間の男であり、女であったことを忘れてしまった。なぜならみなもう一度、人間の男と女に戻っていたからである。ぼつかりと開いた眼窩から焼けるような涙を流していた女は、再び生命の鼓動に突き動かされ、ウクレレの弦をつま弾きながら、未開人の求愛の叫びのような声を張り上げた。まるで原初の世界の暗い森の奥から響いてくるような声であった。その叫び声はあたりの空気を震わせ、優しくも抗いがたく、魅力的であった。莫塵の上でその女の歌のリズムに合わせ、キロリアーナが踊った。疑いようもなかった。そのあらゆる動きの中で、愛が踊っていた。そしてその次に、莫塵の上でキロリアーナとともに踊り出した女は、重い腰とたっぷりとした胸のせいで病に崩れ落ちた顔がまるで嘘のように思えた。それは生命に満ち溢れた死者の踊りであった。彼らの崩れ行く肉体には、いまだ生命が愛を与え、愛を求めていたからだ。視力を失った目から焼けるような涙を流す女が求愛の歌を歌い、踊り手たちは暖かい夜のさなかに愛の踊りを踊り、瓢箪が受け渡されるうちにその場のすべての人びとの頭に、奇怪に変形した記憶と欲望が這いまわるのだった。莫

塵の女とともにほっそりとした少女が踊っていた。その顔は美しく、無傷のままであったが、ねじれた両腕が上下するさまが病に侵された跡を示していた。ふたりの痴愚は奇妙な音をぶつぶつと発しながら別々に踊っていたが、ふたりの存在が生命の下手な真似ごとに見えるのと同様、その踊りもグロテスクで奇妙な愛のまねごとを演じているようであった。

ところが女の求愛の叫びは途中で途切れ、瓢箪はその場に落ち、踊りはやんだ。誰もが海の向こうの深淵に目を向けた。信号弾の光が青白い幽霊のように月夜に揺らめいたのだ。

「兵隊どもだ」クーラウは言った。「明日は戦いになるだろう。早めに眠って戦いに備えよう」

癪者^{おおい}たちはおとなしく従い、崖に穿たれた自分のねぐらに這い戻った。クーラウだけがその場に残り、月に照らされたまま身動きひとつせずらいフルを膝に置いて座っていた。その目は遙かふもとの、浜に乗り上げた舟に向けられていた。

カララウ・ヴァレーのそびえたつ頂はうまい隠れ家であった。キロリアーナを除いては誰も、切り立った岩壁を登る隠れた踏み分け道を知る者はなく、この谷あいまでたどり着こうとするとナイフの刃のような峰を進む他ないのだ。この隘路は長さにして一〇〇ヤード^(九二・トル)ほどであった。しかし幅はせいぜい広いところでもわずか一二インチ^(三〇・四ハセンチ)しかなかった。どちらの側にも深い谷が口を開けていた。いったん足を滑らせると、右側であれ左側であれ、真つ逆さまに落ちて死んでしまうだろう。だがここを通り越すことさえできれば、この世の楽園にたどり着くことができるのだ。植物の海が地表を洗い、緑の大波を岩壁から岩壁へと流し込み、断崖絶壁の縁から巨大な塊をこぼし、シダと緑藻の噴霧を無数の亀裂に滴らせていた。クーラウが統治を始めて何ヶ月も、クーラウとその民はこの植物の海と闘った。息を詰まらせるようなジャングルと、そこにおびただしいばかりに咲き乱れる花々は、野生のバナナやオレンジやマンゴーの周囲から徐々に刈り取られていった。ささやかな開拓地には野生のクズウコンが育ち、岩のテラスにはかき集めた耕作土で満たされ、タロイモ畑が作られ、メロンが植えられていた。太陽の光が差し込む開けた場所にはすべて、パイアの木が、黄金の実をたっぷりつけてしなっていた。

クーラウは浜の近くのもっと低い谷からこの隠れ家まで追い立てられてきたのだった。もし仮に同じようにここから追い立てられたとすれば、もっと奥まった断崖の入り組んだ頂上に谷あいがあるのを知っていた。そこで臣下を率いて生活することができるだろう。今クーラウはライフルを自分の横に置いて寝転がり、葉がもつれてできた仕切りを通して眼下を見下ろし、浜にいる兵隊たちを観察した。巨大な大砲をもっているのがわかった。それにあたって太陽の光がまるで鏡のように反射してきらめいていた。ナイフの刃先のような隘路は自分の目の前であった。そこに続く踏み分け道を這い上ると、人間が小さな点のように動いているのが見えた。この連中は兵士ではなく、警察であるのをクーラウは知っていた。警察がうまくいかなくなって初めて兵士がゲームに参加してくるのだ。

クーラウはねじれた手をいとおしげにライフルの銃身に沿って動かし、照準器に汚れが溜まっていないことを確認した。銃の撃ち方を覚えたのはニイハウで野生の牛を狩っていたときだった。あの島ではクーラウの射撃の才能が忘れられることはない。あくせく登る人間の小さな点が徐々に近づき、大きくなってくると、クーラウは距離を推測し、砲身軸線に直角に吹く風から方向偏差を測り、今いる海拔高度よりはるか下の標的に向けて撃った時に弾丸が連中の頭を越して遠くに外れる可能性を計算した。しかし引き金を引くことはなかった。隘路の入口に達した時点で初めてこちらが見張っていることに気づかせるのだ。クーラウは姿を隠したまま藪の中から声をかけた。

「何しに来た？」クーラウは詰問した。

「我々は癩者らいしやクーラウを捕まえに来たのだ」地元の警察を率いる男がそう答えた。この男自身は青い目をしたアメリカ人である。

「帰れ」クーラウは言った。

クーラウはその男、保安官代理を知っていた。この男のせいでクーラウはニイハウから追い立てられ、カウアイを渡ってカララウ・ヴァレーへ、そして峡谷を追い出されてこの谷あいにやって来たのだ。

「お前は誰だ？」保安官が詰問した。

「俺は癩者らいしやクーラウだ」というのが答えだった。

「だったら出て来い。お前に用があるのだ。死体でも生け捕りでもお前の首には一〇〇〇ドルの賞金がかかっているんだ。もう逃げられんぞ」

クーラウは藪の中で笑い声をあげた。

「出て来い！」保安官はそう要求したが、答えはなかった。

保安官は警官たちと相談していたが、クーラウには自分を力づくでとらえようとする準備を始めたのがわかった。

「クーラウ」保安官が呼びかけた。「クーラウ、今からそっちに行ってお前を捕まえてやるからな」

「ならばその前によく周りを見回して、太陽と海と空を脳裏に刻んでおくんだな。それが見納めになるのだからな」

「いいだろう、クーラウ」保安官はなだめるようにそう言った。「お前が射撃の名人なのはよくわかっている。だがお前は俺を撃てない。お前に何もひどいことをしてないからな」

クーラウは藪の中で不満げなうなり声をあげた。

「おい、わかっているんだろ、俺はお前に何もひどいことをしてないよな」保安官がまたしてもそう言い張った。

「俺を監獄に入れようって言うのなら、そいつはひどいことじゃないか」というのが答えだった。「それに俺の首にかかった一〇〇〇ドルを狙っているのならそれもひどいことだ。」

命が惜しかったらその場を動くな」

「俺はそっちに行ってお前を捕まえなきゃならんのだ。悪いがな。それが俺の仕事なんだよ」

「こっちにたどり着く前に死ぬことになるぞ」

保安官は臆病者ではなかった。だがそれでも決心がつかなかった。両脇に広がる絶壁を見下ろし、これから進まなければならぬ嶺線ナイフ・エッジに視線を走らせた。そしてやっと決心を固めた。

「クーラウ」保安官は呼びかけた。

しかし藪から返事は返って来なかった。

「クーラウ、撃つんじゃない。今からそっちに行くからな」

保安官は振り返って警官たちに何やら命じ、この危険に満ちた道を歩き始めた。ゆっくりと歩みを進めていた。まるで綱渡りをしているようだった。身体の支えになるものは何もない。溶岩の塊が足元で踏み砕かれ、崩れた残骸が道の左右両方からはるか下まで真つ逆さまに落ちていった。太陽は保安官に激しく照りつけ、顔は汗まみれになっていた。それでも前へと進み、やっとこの隘路の中間点にたどり着いた。

「生まれ！」クーラウが藪の中からそう命じた。「あと一歩でも近づくと撃つからな」

保安官は立ち止まり、断崖の上で身体を揺らしてバランスをとりながら、その場にとどまった。顔色は蒼白になっていたが、それでも目は断固とした決意をたたえていた。そしてかからなくなった唇を湿らせてから話し出した。

「クーラウ、俺を撃たないよな。撃てっこないだろ」

そう言ってまた歩き始めた。弾丸が放たれ、その身体がぐるりと半回転した。顔には非難を込めた驚愕の表情が浮かんでおり、そのままよろめいて倒れていった。嶺線ナイフ・エッジに横向きに覆いかぶさって、何とか落下を防ごうとしたが、その瞬間には自分が死ぬことを悟った。そして次の瞬間には嶺線ナイフ・エッジからその姿は消えていた。そのとたん、五人の警官が一列になつて、見事な着実さで嶺線ナイフ・エッジを走って襲撃を企てた。それと同時に警官隊の他の連中が藪に向けて射撃を始めた。まさに狂気の沙汰だ。クーラウは立て続けに五度引き金を引いたが、あまりの早業に銃声は一度しか響かなかった。居場所をずらし、茂みの中をうなりを上げてかすめ飛ぶ弾丸が当たらないように身を低くして、クーラウは敵の方を覗いた。警官のうち四人は保安官の道連れになっていた。五人目は嶺線ナイフ・エッジに横向きに横たわり、まだ息があるようだった。隘路の向こう側にも生き残った警官がいたが、もう誰も発砲していなかった。むき出しの岩ばかりの場所で、連中に勝ち目はなかった。警官たちが這い降りていく間にクーラウは最後のひとりを狙い撃ちすることもできた。だが引き金を引くことはしなかった。警官たちはしばらく話し合った後で、ひとりが白い下着を脱いでそれを旗にして振った。もうひとりを後に従えて、その男は嶺線ナイフ・エッジを負傷した同僚のところまで進み出た。クーラウは

何の意思表示も示さず、警官たちがゆつくりと退却し、小さな点のようになって下の方の谷に降りていく様子を見張っていた。

二時間後、別の茂みの中からクーラウは警官隊が谷の反対側から登ってこようとしているのを見ていた。連中が上へとどんどん登っていくときに野生の山羊がその前を逃げ去って行くのが見えた。徐々に自分の判断が正しいのか不安になってきたので、キロリアーナを呼んでこさせると、自分の隣に這ってきた。

「大丈夫だ、あそこからは登れない」キロリアーナは言った。

「山羊は？」クーラウは尋ねた。

「あの山羊どもは隣の谷からやって来たやつらだ。こっちの谷には来られない。道がないんだ。あの連中は山羊ほどの知恵すらない。谷に落ちて死んでしまうのがおちだ。お手並み拝見と行こう」

「あの連中は勇敢だよ」クーラウは言った。「お手並み拝見だ」

ふたりは朝顔が咲き乱れる中、隣り合わせに横たわっていた。ハイビスカスの黄色い花びらが頭上から落ちてきた。人間の小さな粒が苦勞して登ってくるのを眺めていると、ついに待ち構えていたことが起こった。三人が足を滑らせ、転がり、滑り落ち、断崖絶壁から真っ逆さまに、垂直に五〇〇フィート（五二・四メートル）も落下していった。

キロリアーナはほくそ笑んだ。

そして「これで心配はなくなったな」と言った。

「だが連中には大砲がある」クーラウはそう答えた。「兵隊たちはまだ何もしていない」眠くなるような午後、癩おびを病んだ者たちの大半は岩のねぐらで眠っていた。クーラウは掃除をしていつでも使える状態のライフルを膝に置き、自分のねぐらの入口でうとうととしていた。ねじれた腕の少女が、すぐ下の茂みの中で横たわり、嶺ナイラ・エッジ線の隘路を見張っていた。

いきなり浜で爆発音が聞こえ、クーラウは驚いて目を覚ました。次の瞬間、とてつもない轟音があたりを引き裂いた。身の毛のよだつその音を聞いて、クーラウは肝を冷やした。まるで神々がみな集まって天球を両腕でつかみ、女が綿布を切り裂くようにして、いっせいに引き裂いたかのようなであった。だがその引き裂くような音はあまりに巨大で、しかもものすごい勢いでどんどん近づいてくるのだ。クーラウは不安げに天を見上げ、何か見えないかと目を凝らした。すると頭上の断崖の天辺で砲弾が炸裂し、岩のかけらが断崖のふもとに降り注いだ。

クーラウは手で汗まみれの額をぬぐった。身体がひどく震えていた。これまで砲弾を浴びた経験がなかったのだ。想像をはるかに超えて恐ろしかった。

「ひとつ」いきなり数を数える気になって、カパヘイが言った。

ふたつ目と三つ目の砲弾は甲高い音をたてながら岩壁を越えていき、見えない場所で炸裂した。カパヘイは几帳面に数を数え続けた。癩おびを病んだ者たちは洞窟の前の広場に群がり

集まった。最初のうちはみな怯えていたが、砲弾が頭上を越えていくばかりなのを見て、癩者たちは徐々に落ち着きを取り戻し、頭上のスペクタクルに見とれ始めた。痴愚のふたりは喜びに金切り声をあげ、宙を切り裂く砲弾が行き過ぎるたびに楽しそうに激しい身振りでおどけたしぐさをとって見せた。クーラウも自信を取り戻してきた。こちらに損害はないのだ。あんな大きなミサイルをこんな長距離で撃ったところで、ライフルのような正確な射撃ができるわけではないか。

だがその状況に変化が生じ始めた。砲弾は少しずつ手前に落ちるようになってきた。そしてついにすぐ下の、嶺線のそばの茂みで砲弾が炸裂した。クーラウはそこで見張りをしていた少女のことを思い出し、走り降りてあたりを見た。クーラウが這い降りたとき、茂みからはいまだ煙がくすぶっていた。そしてその場で愕然とした。木の枝は粉々に裂け、砕けていた。少女のいた場所には、地面に穴が開いていた。そして少女の身体はバラバラになって散らばっていた。砲弾はこの少女のいた場所で炸裂したのだ。

まず様子を窺って兵士たちが隘路を登ろうとしないかを確認し、クーラウは走ってもとの洞窟に戻った。そのあいだもずっと、砲弾は頭上をうなり、鳴き、悲鳴を上げていた。谷は爆発で地響きをたてて震えていた。洞窟の見えるところまで来ると、痴愚のふたりが指の付け根を絡ませて手に手をつなぎ、はしゃぎまわっていた。走っているさなかに、痴愚のふたりがいるすぐそばの地面から黒煙が噴き出すのが目に入った。ふたりは爆発で身体ごと吹き飛ばされた。片方はそのまま地面に横たわって身動きしていなかった。もう片方は両手で身体を引きずりながら洞窟の方へと這っていった。両脚は力なく引きずられ、血が身体からこぼれ出していた。まるで血の風呂に浸かっていたようで、這い進むたびに子犬のような叫び声をあげていた。他の癩者たちはカパヘイを除いてみな洞窟に逃げ込んでいた。

「一七」カパヘイは言った。そして「一八」と、またひとつ追加した。

この一番新しい砲弾は洞窟のひとつにまともに当たった。爆発すると、すべての洞窟から一斉に人が逃げ出してきた。だが砲弾の当たった洞窟からは誰も出て来なかった。クーラウは刺すような刺激臭のする煙の中を這って入った。四つの死体がめちやくちやにつぶれた状態で転がっていた。うちひとつは目の見えない女の死体で、ついたった今まで涙の止まることがなかったのだ。

外に出ると、クーラウの民たちがパニックになって、早くも山羊の踏み分け道を登り、峡谷から出て、高台と谷あいに入り組んだ隠れ家に向かおうとしていた。傷ついた痴愚は弱々しく鳴き声を上げながら、這いつくばって両手で身体を引きずり、それについていこうとしていた。しかし岩壁の勾配に差し掛かると、弱々しい力で身体を支えることができず、そのままひっくり返ってしまった。

「殺してやった方がいいだろう」クーラウはカパヘイに言った。カパヘイはもとの場所に座ったままだった。

「二二」カパへいは答えた。「そうだな、殺してやるのが賢いやり方だろうな。二三——
二四」

痴愚はライフルが自分に向けられるのを見ると甲高い声で泣き喚いた。クーラウはためらった挙句、銃を下ろした。

「俺にはできない」クーラウは言った。

「お前は馬鹿だ、二六、二七」カパへいは言った。「よく見ておけ」

カパへいは立ち上がり、手に大きな岩の塊をもって、手負いの生き物に近づいていった。それを叩きつけようと腕を振り上げた途端、砲弾がまともにカパへイにぶつかった。その結果、そのやりかけの作業をする必要がなくなるとともに、それまで続けていた数の勘定も終わりを告げた。

クーラウは谷にたったひとり残された。自分の民の最後のひとりが片輪の身体を引きずりつつ、高台の縁を越えて姿を消すのを見守っていた。その後、振り返って少女が殺された藪のところまで下りて行った。砲撃は続いていたが、その場にとどまった。はるか下の方に兵士たちが登ってくるのが見えたのである。二〇フィート(約六メートル) (一〇センチ)ほど離れたところに砲弾が炸裂した。地面に身を伏せると、破片が身体に降りかかる音が聞こえた。ハイビスカスの花びらのシャワーが舞い降りてきた。頭を上げて踏み分け道を覗き込み、ため息をついた。ひどく恐ろしかった。ライフルの弾丸など怖くはなかったが、この砲撃はすさまじかった。砲弾が金切り声を上げて通り過ぎるたびに、クーラウは身体が震え、しゃがみこんだ。だがその都度頭を上げて、また踏み分け道を見張るのだった。

ついに砲撃がやんだ。兵隊どもがすぐ近くまで来ているからだろう、とクーラウは類推した。兵士たちは一列になって踏み分け道を這い進んでいた。クーラウは何人いるのか数えようとしてみたが、すぐにわからなくなってしまった。いずれにせよ一〇〇人かそこらはいらだろう——全員が癩者らいしやクーラウを狙っているのだ。そう思うとつかの間、ブライドが刺激される思いだった。大砲とライフルをもって、警察と軍隊が俺を追ってくるのだ。しかも俺はたったひとりで、おまけに片輪になった、人間のなれの果てときている。俺の首に、生け捕りでも死体でも一〇〇〇ドルの賞金を懸けたという。一生涯そんな大金を手に入れたことすらない。そう考えると苦々しい思いがした。カパへイの言うとおりであった。俺は、クーラウは、何も悪いことをしていない。白人どもが盗んだ土地を開墾するのに労働力が必要で、だから中国人の苦力クイリを連れてきた。その連中と一緒に病がやって来たのだ。そして俺が病気になるからといって、俺に一〇〇〇ドルの値打ちがついたのだ——だが俺自身が値打ちなのではない。病に朽ち果てるか、砲弾の破裂で死んでしまい、役に立たなくなった死骸にこそ、それだけの金を払う値打ちがあるのだ。

兵士がナイフの刃のような隘路にたどり着くと、連中に警告を与えようかと思った。しかし殺された少女の死体に目をやると、そのまま口をつぐんでいることにした。六人が思い切

ナイフ・エッジ
って嶺線を進み出すと、クーラウはそれを狙い撃ちした。嶺線に誰もいなくなっても撃つのをやめなかった。弾倉が空になるまで撃ち尽くすと、弾を込めてまた空になるまで撃った。そうやってただ撃ち続けた。自分のしでかした間違いが頭の中で燃え盛っており、復讐の炎に焼かれていたのだ。山羊の踏み分け道からは兵士たちが撃ち返していた。みな地面に身を伏せ、地面のわずかな起伏の陰に身を隠そうとしていたが、クーラウからすればむき出しの標的でしかなかった。弾丸がうなり、クーラウの周囲に突き刺さり、たまに跳弾が甲高い音をたてて空気を切り裂いた。一発はクーラウの頭をえぐって一本の筋を刻んだ。別の一発は肩甲骨を突き抜けたが、皮膚は破れていなかった。

まさに大虐殺であったが、それをやってのけたのはたったひとりの男であった。兵士は負傷者に手を貸しながら退却を始めた。そこを狙い撃ちしながらクーラウは肉の焼ける臭いに気がついた。何から漂ってくるのかとあたりを見回したが、実は自分の手が焼けているのだった。ライフルの熱のせいだった。癩病はクーラウの手の神経をほとんど全部破壊しつくしていた。肉が焼け、その匂いを嗅ぎながらも、感覚はまるでなかったのだ。

クーラウは藪の中に横たわり、笑みを浮かべて大砲のことを思い出していた。間違いなく連中はまた自分に向けて撃ってくるだろう。今度は奴らに大損害をくれてやったこの藪を狙ってくるはずだ。岩壁の小さな張り出しの陰になった一角には砲弾が落ちていないことに気づいていたので、そこに場所を移したが、そのとたんに爆撃が再開された。クーラウは砲弾の数を数えた。六〇発を新たに谷に撃ち込むと、大砲は砲撃をやめた。このほんの小さな区画は爆弾の跡で穴だらけになり、生き物など絶対に助かりそうには思えなかった。兵士たちもそう考えたのだろう。午後の太陽が燃え盛る中、兵士たちはまたしても山羊の踏み分け道を登って来た。そしてまたしてもナイフの刃のような隘路をめぐって攻防が繰り返られ、またしても兵士たちは浜へ引き上げていった。

それからさらに二日間、クーラウはその隘路を死守した。だが兵士は砲弾をその隠れ家に撃ち込むことしかしようとしなかった。その後、パハウという名の癩病にかかった子どもが、その谷あいの背後にそびえる岩壁の天辺に現れ、大声でクーラウに呼びかけ、キロリアーナが食料を手に入れようと山羊を狩っている途中で谷底に落ちて死んでしまったこと、女たちがどうしているのかわからず途方に暮れていることを伝えた。クーラウは少年を呼び降ろし、予備の銃を渡して隘路を守るように言いつけた。クーラウが行ってみると、臣民たちはみな意気消沈していた。大半は身体が不自由すぎて、このような危険な状況の中、自力で食料を確保することなど到底できそうになかった。そしてみな腹をすかしていた。クーラウはまだ病がそれほど進行していない女をふたり、男をひとり、選り出し、谷まで降りて食料と莫産をもってくるよう言いつけた。残りの者には力づけ、慰めながら、一番力のないものにまで手を出させて身を守るための大雑把なシェルターを築かせた。

しかし食料をとりに行った者たちは戻ってこなかった。そこでクーラウも谷あいまで戻

っていった。岩壁の崖鼻に出ると、ライフルが六挺、いつせいに鋭い音をたてた。弾のひとつが肩の肉づきのいい箇所を貫き、別の弾丸が崖に当たって砕け、その岩のかけらが頬をかすって切り裂いた。銃撃が始まったとたん、クーラウは後ろに飛び退ったが、その際に、谷あい兵士たちで埋め尽くされているのが見えた。クーラウの臣民が裏切ったのだ。砲火はあまりにも恐ろしく、臣民たちはモロカイの監獄の方がましだと考えたのだ。

クーラウは背後に後退し、重い弾帯を肩から外した。岩の間に身を潜め、兵士のひとりが頭と肩がはつきり見えるまで登ってくると引き金を引いた。二度、同じことが繰り返されると、しばらく間を開けてから、頭と肩の代わりに白旗が、岩壁の上部に突き出された。

「なんの用だ？」クーラウは詰問した。

「お前に用があるんだ。お前は癩者クーラウなんだろ」と返答が返って来た。

クーラウは自分がどこにいるのかも忘れ、他のすべてを忘れ、身を伏せながら内心驚嘆していた。この白人どもは信じられないほど我慢強い。たとえ空が落ちてきても自分の意志を貫こうとするのではないか。そうだ、奴らはあらゆる人々、あらゆる物事を支配して自分の意志を通そうとするのだ。それを強いるのに、たとえ死ぬことになっても。それはもう称賛に値するのではないか。奴らの抱く意志は生命よりも強く、あらゆるものを意志の命ずるままに捻じ曲げなければ気が済まないのだ。クーラウはこの戦いが勝ち目のないものであることを確信した。白人どもの強烈な意志には逆らいようがないのだ。たとえ一〇〇〇人殺そうと、海辺の砂のように、また立ち上がって俺を狙ってくるのだ。それもどんだん数を増やしながら。自分が敗北することなど決して認めようとはしない。それは奴らの欠点でもあり、長所でもあるのだ。俺の部族にはそこが欠けているのだ。今となってはよくわかる。神のことは、ラムのことは説く者たちが、ほんの一握りの数しかいないのにどうやってこの土地を征服できたのか。その理由は――

「さあなんとか言うことはないのか？俺と一緒に来るのか？」

白旗の下で身を潜めている男の声だった。ここにも白人らしく、決めた目的に向かって真っすぐに突き進む気味にいる男がまたひとりいるのだ。

「話をしよう」クーラウは言った。

その男の頭と肩が姿を見せ、次に全身が現れた。のつべりとした顔に青い目をした二五歳くらいの若者で、大尉の制服を着た身体は痩せていて、小ぎれいだった。男は少し前に歩み出て立ち止まり、一二フィート（約三メートル）ほど離れたところに腰を下ろした――

「お前は勇敢な男だな」クーラウは驚いたように言った。「俺はお前をハエみたいに殺してしまふこともできたんだぞ」

「いや、そんなことはしないよ」というのが返事だった。

「なぜだ？」

「お前が本物の男だからだよ、クーラウ。悪い男ではあるがな。お前の活躍は聞いている

よ。ずいぶんたくさん殺したものだ」

クーラウはうなっただけだが内心得意になっていた。

「俺の民に何をした？」クーラウは問い詰めた。「少年と、ふたりの女と、男だ」

「投降してきたよ。お前にもそうしてもらおうと思っただけで来たんだ」

クーラウは信じられないといった顔つきで笑った。

「俺は自由だ」クーラウはそう言い放った。「何も悪いことはしていない。ただ放っておいてほしただけだ。俺は自由に生きてきたし、自由に死んでいくのだ。絶対に投降などしない」

「ではお前の民の方がお前より利口なのだな」若い大尉はそう答えた。「見ろ——連中がやって来る」

クーラウは後ろを振り向いて、部族の残りの人々がやってくるのを見た。うめき声をあげ、ため息をつきながら、ぞっとするような行進を続け、みじめさを引きずりながら通り過ぎていった。その間、クーラウはさらなる苦々しさを味わう羽目になった。なぜならみな通り過ぎてから、クーラウに向かって罵りと侮辱のことばを浴びせて行ったからだ。最後尾であえぎあえぎ歩いてきた老婆は骨ばってハルビユイアのような鉤爪を突き付け、歯をむき出した死神のような顔を左右に振りつつ、クーラウに呪いのことばを投げつけた。ひとり、またひとりと岩壁の縁を越えて降りて行き、身を隠す兵士たちのところに降伏していった。

「もう行け」クーラウは大尉に言った。「俺は絶対に投降したりしない。これ以上話すことはない。じゃあな」

大尉は崖を乗り越えて兵士たちの方へ滑り降りて行った。次の瞬間、休戦の旗をつけることなく、銃ケースの先に帽子をかぶせて持ち上げてきた。クーラウの銃弾はそれを貫いた。その日の午後、兵士たちは浜から砲弾を浴びせてクーラウをあぶりだそうとした。クーラウはもつと高い場所にある、人の入り込めない谷間に退却し、兵士たちがそれを追った。

六週間にわたって谷から谷へ、火山の山頂を越えて山羊の踏み分け道をたどって兵士たちはクーラウを狩りだそうとした。ランタナのジャングルに潜んでいるとき、兵士たちは勢子の列を作り、ランタナのジャングルとグアバの低木林を一方から迫りながら、ウサギ狩りのようにクーラウを狩りだそうとした。だが毎度のようにクーラウは方向を変え、裏をかいで逆戻りし、追っ手をかいくぐった。クーラウをおびやかすことはできなかった。至近距離に近づきすぎると、正確なライフル射撃で圧倒され、山羊の踏み分け道を負傷者を担いで浜まで降りていく羽目になるのだ。時としてクーラウの褐色の身体が一瞬低木の隙間から見えたとときに射撃を浴びせることもあった。一度は五人の兵士が谷と谷の間のむき出しになった山羊の踏み分け道でクーラウの姿を捕らえたこともあった。兵士たちがライフルが空になるまで撃ちまくると、クーラウは足を引きずりながら目もくらむような道を登って行った。しばらくして血の跡が残っているのを発見し、クーラウが負傷していることがわかつ

た。六週間が過ぎると、連中はついに諦めた。兵士も警官もホノルルに戻っていき、カララウ・ヴァレーはクーラウたったひとりに残された。時折、賞金稼ぎがクーラウを追ってやってくることもあったが、みな返り討ちにあって殺された。

二年後、死期が迫っているのを知り、クーラウは茂みに這いだしてセンネンゾクの葉と野生のジンジャーの花の中に身を横たえた。これまで自由に生き、そして今自由のまま死んでいくのだ。霧のような雨がわずかに降り始めたので、クーラウはぼろぼろの毛布を引き寄せ、ゆがんだ手足の残骸を包み込んだ。身体はオイルスキンのコートで覆われていた。胸にはモーゼルのライフルが置かれており、銃口についた水滴を愛おしげに拭い取りながら、しばらくの間、死が訪れるのを待っていた。銃口を拭う手には、引き金を引く指すら、もう残っていなかった。

クーラウは目を閉じた。身体の衰弱と千々に乱れる思考の中で、死が間近に迫っていることを知っていたのだ。野生の動物のように、自らの死を迎えようと隠れ家まで這ってきたのだ。なかば意識を失いつつ、我知らずのうちにとりとめもなく、ニイハウで過ごした青年時代にまで戻って人生をたどりなおしていた。生命が薄らぎ、雨のしずくが耳の中でどんどんおぼろになっていく中、クーラウは自分が今、馬の調教をしているのだと思い込んでいた。乗っている荒い気性の仔馬が後ろ脚で立ち上がり、自分を振り落とそうとしている。クーラウは鎧あぶみを腹の下でしっかりとくつつけたり、崩れかかった柵囲いに向けて狂ったように突進し、手助けをしようとするカウボーイたちを柵の向こうに蹴散らしたりしていた。次の瞬間にはまるで当たり前のように高台の牧草地で野生の雄牛を追いかけ、首にロープをかけて谷まで引きずり降ろそうとしていた。いま一度、汗と、焼き印を押す畜舎に漂う埃が目にと刺さり、鼻を突いた。

たくましい健康な青春時代が再び戻って来たのだ。しかし迫り来る死が引き起こす鋭い激痛のせいで、クーラウは意識を取り戻した。そして奇怪な形の手を持ち上げ、不思議そうにそれを眺めた。どういうことだ？ なぜなんだ？ あの荒々しい健全なる青春が、どうしてこんなふうに変わったのだ？ それからクーラウはすべてを思い出し、いま一度、つかの間だけ、彼は癩者癩クーラウであった。臉は疲れたようにゆらゆらと下がってきて、雨の落ちる音はもはや耳の中で鳴っていないかった。長く続く震えが全身を襲った。そしてそれも止まってしまう。わずかに首をもたげ、すぐにまた下ろした。そして目を開くとそのまま閉じることがなかった。最後に考えていたのは、モーゼルのことだった。クーラウは折り曲げた指のない手でそれを胸にぎゅっと抱きしめた。